アレクサンドロス大王と希臘世界（下）

井上智勇

五ノ一

アレクサンドロスが幼にしてアリストテレースに師事し、希臘文化人として養成されしことは周知の事實である。[1] テーバイ陷落の秋彼がピンダロスの生家を破壞するを禁止せしは、[2] その希臘文化愛好精神の一發露であつた。遠征中各所に於て希臘諸神へ捧げし供犧も、[3] 希臘文化人としてのアレクサンドロスの行事と觀るによつて理解される。ヘラス聯盟々主としての彼の法的地位も彼の希臘的精神の顯現とも見得るであらう。總じてアレクサンドロスの世界史的地位理解の一鍵鑰は希臘文化荷擔者として彼を觀るにある。かの異說紛々たるアレクサンドロスのアムモーン參詣事實の眞意義の把握も、右の如き立場に於て此事實を考へる時可能なのではなからうか。かくて筆者はこゝにアムモーン參詣の事實を通してアレクサンドロスと希臘世界との關係を檢證せんと欲する。

アレクサンドロスのアムモーン參詣てふ事實それ自體に就いて今日疑を挾む者はない。然らばその事實は如何なる意味をもつものであるか。從來此の事實の示す歷史的意義として主張される所の代表

的なるは次の三種となし得るであらう。

その一はマイヤー Ed. Meyer 氏説で、彼は此アムモーン參詣事件を、希臘宗教思想に存する以人爲神思想とアレクサンドロスの世界支配觀念とによつて理解せんとする。卽ち彼は、アレクサンドロスが希臘宗教思想に化せられたるを前提とし、自らアムモーンの子と託宣され、以て希臘人と自己との關係を神と人との關係に轉化せしめ、兩者の間に越ゆ可らざる一大溝渠を掘り世界支配者たるの地位を基礎づけんとしたのである、と主張する。④

その二はケールスト J. Kaerst 氏説である。氏はアレクサンドロスがアムモーンに參詣した事實は、アムモーンの託宣が既に希臘世界に深く信仰されて居たこと、アレクサンドロスが先づアムモーンの託宣によつて希臘世界を自己藥籠中にをさめ、希臘思想の行渡る限りの他の世界をもその膝下に屈せしめんとするによつて理解されるとする。⑤ケールスト氏が希臘に於けるアムモーン崇拜を言ふは、確にマイヤー氏より一歩進んだと考へられる。併し兩氏共に希臘宗教精神を前提としそれが政治的政策として露されたとするに於てその軌を一にすると言ひ得る。換言すれば、兩氏の立場の前提は、共に、アレクサンドロスがその託宣を豫想して居たとするにある。是兩氏の説に共通する特質である。

その三は、ウィルケン U. Wilcken 氏説である。曰く、「かくてアレクサンドロスは未來を卜すべくアムモーンの神託を受けんとした。我々はアレクサンドロスが夢・飛鳥、或は他の如何なる自然現然

によつて示されるにしても神託を重大視したといふ點に、彼が尙時代の子なるを思ふのである。併し何故アレクサンドロスはアムモニオンに詣でたのであるか。彼のアムモーン參詣はファラオとしての彼の地位とは何ら關係するものではない。何故ならば、ファラオにしてオアシスに行幸せし者未だないからである。隨つてアレクサンドロスのアムモーン參詣に際しては、彼がそのエヂプト臣下に就いて念慮したとも考へられぬ。かくの如き爲にせんとする示威運動として、アレクサンドロスはアムモーン參詣を行つたのでは斷じてない。然り、彼は希臘人として此神に詣でたのである、何故ならば、此神の託宣は當時希臘世界に於て誤なきものと信ぜられて居たからである。（備考、△印は原文イタリックなるを示す）」と。⑥ウィルケン氏がこゝに「未來を卜すべく」と云つてゐる所の未來は、氏に於ては、少くともアレクサンドロスのアジア征服の意圖を指してゐるのである。⑦卽ちウィルケン氏に於ては、希臘宗教精神とアレクサンドロスの支配意識にアムモーン行を關聯せしめることに於て前二氏と通ずる所あるも、前二氏が窮局は政策說をなすに反し、託宣を託宣としてゐるに相違する所をもつのである。前者を假りに政策說と言ひ得るならば後者は信仰說と言ひ得るであらう。筆者はこゝに右諸說成立の前提條件を檢討し、その何れをとるべきかを決定せんとする、是本節の目的である。

（註）

① Cicero, De oratore. III. 141.

Gellius. VIIII. 3.

Pseudo-Callisthenes I. 13. には、乳母はラニケー Lanike, 讀書の教師は、ポリネイケース Polyneikes, 音樂教師はレウキッポス・レームニオス、數學教師としてはメネクレース Menekles, 雄辯術師は、アナクシメネース Anaximenes, 哲學教師はアリストテレース Aristoteles として居る。併し Athenaeus IV. p. 129 A. には、スパルタ人メラノス Melanos 及レオニデース Leonides が養育掛、讀書教師は、スパルタ人ポリネイケース、音樂教師はレモノス島の人アルキッポス Alkippos, 數學教師はメニッポス Menippos, 雄辯術教師はアテナイ人アリストマネース Aristomanes, 哲學教師はミレートス市の人アリストテレース及ラムプサケース Lampsakes であるとして居る。何れにしてもアレクサンドロスが早くより希臘文化人として教育されたことだけは疑ない所である。

② Arr., Anab.; I, 9.
Ps. Call. I, 27. I, 46.

③ Arr., Anab.; I. 4. I, 7. II, 24. Plut., Alex. II. Diod. 14. Just, XI. 3. にアレクサンドロスがヅェウス・ソーテール、ヘラクレース等に供犠せるを見るべく、Arr., Anab.; I. 17. にはサルデスにてヅェウス・オリムピオスの神殿を建立するを見るであらう。

④ Ed. Meyer, Alexander der Grosse u. die, absolute Monarchie (Kleine Schriften I. Aufl. Halle 1924. S. 304—312.)

⑤ J. Kaerst, Geschichte des Hellenismus Bd. I. Leipzig u. Berlin 1927. S. 384 ff.

⑥ U. Wilcken, Alexander der Grosse. 1931, S. 111 f.

⑦ かく云ふ所以は、ウィルケン氏は同書百十頁以後に次の如く云つて居る。

「アレクサンデルがアレクサンドリアの海岸に逗留せる時、彼の海軍の提督ヘゲロコス Hegelochos がエーゲ海を再び征服したとの報が齎した。且ペルシア海軍が解消した後レスボス、キオス、コース、テネドス等が總て再び屈服したと報じた。此際アレクサンデルの行爲は、從來彼がコリント同盟に對してとり來れる態度が變革せるを示して居る。一年前キオスの離叛せし故を以て之を包圍せし時は、謀叛者を捕へんか之が處置を同盟の常置委員に委すべしと布告した。然るに今やキオスの

謀叛人を該委員會に送らず、アレクサンデルは獨斷で之をエレパンティネに送るべしと命じたのである。此事たる彼がヘラス同盟から獨立的地位に立ちしことを示し、前記委員會の權利を否定したことを意味する。

シリア、エヂプトの征服、海上制覇は彼の權勢感情 Machtgefühl を高めたであらう。又恐らく彼の此精神昂揚の基礎には、二十四歳の若さを以て既にエヂプト數百萬の民草の上に神となりしことが考へられるであらう。……彼にとつてダリウスとの決戰の前に、彼の未來についての託宣をきかんとする內心の要求があつたのである。云々」卽ちウィルケン氏にとつて此時季のアレクサンデルが既にヘラス聯盟規約による法的地位を越えんとし、遠くアジア征服への熱望に燃えて居る者と思惟されて居るのである。

五の二

アムモーンは元來エヂプトのテーベの古き守護神であつて、第十二王朝が起りテーベがエヂプトの主都となるに及んで、此都市の守護神アムモーンは太陽神と結びつきアムモーン・ラーとしてエヂプト全土の最高神となつた、其後多少の變化はあれ大體エヂプト人の篤き信仰・崇拜の對象たりしことに變りはなかつたと稱せられる。① マイヤー氏によれば、希臘人が紀元前六百三十年頃キレナイカに植民すると共に彼等はリビアのアムモーンを知つたとあるが、② 此如き早き時代のことは暫く措くも、我々は前五世紀及四世紀の希臘人のアムモーン崇拜の眞相は之を當時の詩歌・散文又は碑文によつて窺ひ知ることが出來るであらう。其二三の例證を示さう。

ピンダロス「ピティア」篇、第四卷第十九行以下、

かくて此時彼女は武勇の譽高きイアソーンの水夫達、神にも似たる（半神なる）水夫に呼びかくと

いざ聞こし召せ吾言の葉を、神と氣高き人の子等

海波押寄す此地より、

かのエバソスの乙女、諸々の都市の一が、

ヅェウス・アムモーンの總べ給ふ地に、

移し植ゑらる日ぞ來べき。③ 云々。

アリストバーネースの詩篇「鳥の國」第五卷六百十六行以下、

此美しき群なす鳥に、意氣陽々と飛翔せる群に、神祠の如く、綠濃き橄欖の樹聳え立ちぬ。

我等最早、デルポイの竈、アムモーンの祭壇に供犧するに彷徨することあらじ。④

右の證左により我々は前五世紀の希臘人にリビアのアムモーン神が崇拜され、ヅェウスと同視されて居るのを知る。希臘人にとつてヅェウスは「凡てを知るもの」として託宣豫言をなす神である。⑤ アムモーンが希臘人の心に入るのも亦此意味に於ける神としてではなかつたか。

ヘロドトスは、リディア最後の王クロイソス（B.C.五六三—五四六）に就いての物語の中に、アムモーンの託宣を最も崇敬信頼される託宣の一と云ひ、⑥ 又「ドドナ Dodona の巫女、予（ヘロドトス）に向ひ、昔エヂプトのテーバイより二羽の黑鳩飛出でしが、その一羽はアムモニオンを、他の一羽は此ドドナの

託宣所を開けり、と語り聞かしぬ」と記して居る。[7] ドドナは言ふ迄もなく希臘人の尊崇篤き託宣道場の所在地である。[8]

アリストバーネース亦歌つて居る。[9]

Ja dienen wir doch euch Menschen so viel, als euer Orakel in Delphi und Dodona vermag und der Ammonaltar euch leistet und Pholbos Apollon.

哲人プラトーンはその著法律篇にて、新に國家を建設せんとする者、或は荒廢せるを再興せんとする者にして常識ある立法者ならんか、彼はデルポイ、ドドナ、或はアムモーンの神託に從ふであらうと述べ、[10] 又その著アルキビアーデース篇に於ては、篇中の主人公ソークラテースをして「序に私が兩親から聞いて居る話を教へてあげよう。それはアテナイ人とラケダイモン人とが戰つた時の話ですがね。あの時私達の町は、海戰に陸戰に、連戰連敗と云ふわけだったんです。そこでアテナイ人は、どうすれば此苦境から逃れることが出來るかを知る爲にアムモーンの神託をうかゞふことにして、アムモニオンに使節を派遣したのです。[11] 云々」と云はしめて居る。

プルタルコス「キモーン傳」第十八節には、ペルシア王キロスとの戰鬪中キモーンが、或祕密の疑問をアムモーンにたづね、その託宣をきゝたるが見え、同じく彼の「リサンドロス傳」第二十章には、スパルタの勇將リサンドロスがトラキアのアビタイ Aphytai 市を包圍せし時、一夜リサンドロスの夢中

にアムモーン現はれ此包圍を解くべしと告ぐ、リサンドロスは卽ち此夢中の御告に服從して此圍を解き、アビタイ市民にはアムモーンに供犧すべきを命じたとある。[12] 卽前五世紀より四世紀にかけての希臘世界にアムモーン崇拜の盛なりしことは動かすべからざる事實である。然らば前四世紀末に就いては如何。筆者の未だ僅少なる讀書に歸因するかと思はれんも、未だ筆者は、當時の著作物より當時の希臘世界に於けるアムモーン崇拜に關する記事を見ない。併し乍らこのことたる勿論當時アムモーン崇拜の消滅を示すものではない。何となれば前三三三／二年アテナイのアルコーンたりしニコクラテースの時の碑文が、當時尙アムモーン崇拜の篤かりしを示すからである。卽ち曰く、

ἐπὶ Νικοκράτους ἄρχοντος
ἐκ τῆς θυσίας τῆ Εἰρήνη
παρά στρατηγῶν ΓΗΗΗΗΗΓΔΔΔΤΤΤΤ
ἐκ τῆς θυσίας τῷ Ἄμμωνι παρὰ
στρατηγῶν ΔΔΔΔΤΤΤΤ ///C.

ニコクラテース　アルコーンの年
女神平和（エイレーネー）に諸將軍の捧げし供犧の費用は
八百七十四ドラクマ、

アムモーンに諸將軍の捧げし供犧の費用は

四十四ドラクマ四オボル半。[18]

尙アッティカ碑文全集には今一つ次の如きがある。

θεοροὶ Ἀθήνηθ[εν.....]ον ἤγαγον

τῷ Ἄμμωνι τ[.....]ερώνυμος [Πεν]ομα[ν]τ[ου;

アテナイより神使……詣ず(又は運ぶ)

アムモーンに……クセノバンテースの子ヒエロニモス、云々。[14]

ἤγαγον の前の…ος が名詞ならば此動詞は運びぬ、又は捧げぬ、と譯すべく、副詞ならば詣づと譯すべきであらう。

何れにしても大した相違はない。

此碑文の年代は不明である。よしマース Maas 氏の擧示せるキルヒナー Kirchner 氏の推定たる、此處に見えるヒエロニモスを、アリストパーネースの Acharnanes 387. 等に見えるアッティカの悲劇作家であり酒神頌歌作者なるヒエロニモスの子孫とすることが正鵠を得てゐるとしても、僅かに前五世紀末以後の人と知られるのみである。アッティカ碑文全集編纂者キルヒナー氏は此碑文配置の順よりみて前三五〇年代より三三〇年代のものとして居るやうである。少くとも、アッティカ碑文にして前二世紀後アムモーン崇拜に關するものを見出さず古典著述家の傳承にも之を見ない所から推して、當

碑文が前五―四世紀アムモーン崇拜の盛なりし時代のものとすることは恐らく誤ないであらう。

以上の諸例證により明なるはアレクサンドロス出現前よりアムモーン崇拜が希臘に於て盛なりしこと、その崇拜は多くの證左の如くその託宣に對する信頼・尊崇を基調とせることである。希臘的教育を受け希臘的文化人たりしアレクサンドロスがアムモーンの神託の憑むべきを早くより知つて居たとするに何ら不思議を覺えない。ケールスト氏、ウィルケン氏がアレクサンドロスのアムモーン參詣の宗教的方面の根據として希臘世界のアムモーン崇拜を擧示したことには十分の理由あるを思ふのである。

然らばアムモーン參詣事件は如何なる意味を以てアレクサンドロスの政治と結合するか。ケールストの如く「アムモーンの託宣によつて希臘世界を自己藥籠中に納めん爲」の政策とすることが容れられるか否かには、當時のアレクサンドロスの對希臘關係を檢討すべきが要求されやう。又マイヤー氏の如く、アムモーン行を以て直ちに希臘のアポテオーシス思想と結びつけることは「アムモーンの子」たることが託宣前何らかの意味でアレクサンドロスに知られて居るとするによつて初めて可能である。筆者は是等の諸點に就いては尙考究する必要あるを思ふ者である。

（註）

① Ed. Meyer, in Roscher; Ausführliches Lexikon der Griechischen u. Römischen Mythologie I. S. 283 ff

② Ibid.

③ Pindaros, Pyth. IV. 1. Antistrophe. Epaphos は希臘神話に現はれる人物、語原は ἐπί=auf, ἁφή=Berührung, Hand. Aischynes は Prometheus Desmothes 849. に Epaphos なる名の起源を、ヅェウスがイオに觸れたことに歸して居る。

エパポスはヅェウスとイオの子、イオがネイロス(ナイル)河の岸邊に漂着した時に生れた。エパポス長じてエヂプト王となり、ネイロスの娘メムピスと結婚、娘リビアを生む。此名に因み地名リビア起る——是が希臘人に考へられた神話的物語である。

ピンダロスは又歌つて居る。

So vernimm', Du Kamest als Gatte von ihr zu diesem Thal, und übers Meer hin wirst du nach Zeus' erlesenem Garten sie bringen, wo du sie machen zur Stadtvorsteherin wirst, wenn daselbst ein Inselvolk am Hügel sich sc'aarte, dem flurumringten; dann wird Libya herrlich und breit pragend in Aven. (Pyth. IX. vs 89 f.).

此處にヅェウスとあるは勿論アメモーンを指示して居る。

Vgl. Herodot. II. 42. Ἀμοῦν γὰρ Ἀιγύπτιοι καλέουσι τὸν Δία. II. 54. ἔφασαν οἱ ἱρέες τοῦ Θηβαιέος Διὸς δύο γυναίκας ἱρείας ἐκ.

Θηβέων ἐξαχθήναι ὑπὸ Φοινίκων.

④ Vogelstaat, V. 616 f.

⑤ 原隨園氏著「オリンピア祭に就いて」(史潮第一年、第二號)二二頁參照。

⑥ Herodot. I. 46.

⑦ Herodot. II. 54 f.

⑧ 原隨園氏の前掲論文に詳し。

⑨ Vogelstaat, V. 716 f.

⑩ Platon, Leges, V. 738.

⑪ Platon, Alcibiades. II. 148 f.

⑫ Pausan. III. 18, 3.

(13) C. I. G. 157 Z. 30f.=C. I. Att. II. p. 2. 741. fr. a. Z. 29 f.

(14) C. I. Att. 819 vs. 14—16.

五の三

アレクサンドロスのアムモーン參詣が何らかの意味に於て彼の政治的目的と關聯すべきは一應考へ得られることである。此ことに關して、夫がエヂプト土着民に對する政策とするの誤なるは既に定說となれるやうである。[1] 事實、メムフィスに入城せしアレクサンドロスは既にエヂプト人の大歡迎裡にファラオの後繼者となり、隨つて、ウィルケン氏も云へる如く、エヂプト人にとつては彼は神威の顯現と考へられた筈である。かくの如き彼が尙エヂプト人の好意を迎へる爲に遙沙漠の彼方の神祠を訪れるとすることは理解し難い所である。然らばケールスト氏の如く之を希臘人に對する政策とすることは如何。このことは當時のアレクサンドロスと希臘世界との結合狀態を觀、是との關聯に於て考察されねばならない。

先づ最近アレクサンドロスが通過し來れる小亞の諸都市と彼との間は如何なる關係を以て結合されて居たか。筆者はこゝに、アレクサンドロスの遠征記として最も史料價値の大なるアリアヌス著アナバシスにより、小亞各地の住民とアレクサンドロスとの關係を列擧するであらう。

一、ヘレスポントスに臨むプリギアにて、

アレクサンドロスは此地の住民に、彼等が從來ダレイオスに納めたりし稅を彼に納稅すべきを命じ、城砦より出でて降伏せし者を故鄕に歸らしむ。②

一、サルデスにて、

當市の城に據りし駐屯兵の隊長ミトレーネース Mithrenes 及市の有力者出でてアレクサンドロスを迎ふ。前者はその城と資金全部とを、後者はサルデス市を王に讓渡す。アレクサンドロスはミトレーネースを臣下に加へ、サルデス市民及附近のリデアィ人には其地の古法(筆者曰、ペルシアの勢力に蹂躙される前の法律)によつて生活するを許し、彼等に自由を與ふ。③

一、エペソスにて、

當市駐在のペルシア兵二艘の船に乘りて逃亡。アレクサンドロス戰はずして入城し、寡頭政治を廢して民主政治を復活せしむ。小數の有力者に對する恐怖から解放されし市民は、曩に親ペルシア的なるロードス島の人メムノンを招きアルテミスの神殿を破壞し、神殿中のピリッポスの像を毀ち更に市の自由獲得運動者たりしヘロピトス Heropythos の墳墓を發きし者等を追放に處す。④

當時マグネシア、トラルレース兩市より使者來りて各々其市をアレクサンドロスに讓渡す。王乃ち兵を其れ等の都市、及び未だペルシアの支配下にあるアイオリア人並にイオニア人の諸都市に派し、寡頭政治を廢し民主政治を復活せしめ、從來ペルシアに納めたり稅を免せしむ。⑤

一、ミレトスにて

此市を攻略。灣上の島に據りて尙反抗する者あり、王その勇敢なるを愛で、彼等をその軍隊に編入するを條件として和す。ミレトス市民には生命と自由とを與ふ。⑥

一、カリアにて、

アレクサンドロスはハリカルナッソス市を破壞しカリア內部に向ふ。アリンダ市の支配者アダ之を迎へアリンダ市を讓渡し、王をその養子にせんと申出づ。王之を受容し彼女にアリンダのみならず全カリアの支配權を與ふ。⑦

一、リキアにて、

リキアの諸都市王にその支配權を讓渡す。

一、アスペンドスにて、

アレクサンドロス此市に入る前に、此市の使者來り、その都市は之を讓渡すべきも、駐屯兵は之を置かざらんことを請願す。アレクサンドロスは之を許容しその代償として金五〇タレント及び彼等がダレイオスに納めたりし馬の提供を要求す。……アスペンドス市はアレクサンドロスの去るを見て前の約束を破棄せんとす。アレクサンドロス直ちに引返して之を包圍す、市民乃ち前の約束履行すべき故を以て和を乞ふ。アレクサンドロス之を卻け市の有力者を人質となし、前約の

馬及び金百タレントを要求し、彼の任命すべき代官に從ふべきを命じ、年々マケドニアへ納稅すべきを命ず。⑧

アリアヌスの報ずる以上の如き諸例に見られる如く、小亞に於けるアレクサンドロスの政策は、從はざるものはあく迄之を討伐したるも大體に於て諸市、諸地方民をペルシア政府の重壓より解放し、その自由を復活したのである。彼と彼等との關係は——勿論彼は各地方に殆んど例外なく駐屯兵を殘留せしめて來たが——征服者と被征服者といふが如き政治的上下關係ではなく、むしろ救濟者と被救濟者ともいふべき情誼的內的結合である。アリアヌスによつて知られる小亞細亞世界とアレクサンドロスとの如上關係は、その大綱に於ては決して疑ふべきものでない。何となれば我々はそれを當時の碑文によつても立證し得るからである。卽カリアのイアソス Iasos 市出土の碑文には曰く、

〔Ἐπειδὴ Γο〕ργος καὶ Μυνίων Θεοδό〔του υἱ〕οὶ κ〔αλ〕οὶ κἀγαθοὶ γεγένηνται〔πε〕ρὶ τ〔ὸ〕 κοινὸν τῆς πόλεως, 〔κα〕ὶ πολλοὺς τῶν πολιτῶν ἰδίᾳ εὖ 〔π〕εποιήκασιν, καὶ ὑπὲρ τῆς μικρῆς θαλλάσσης διαλεχθέντες Ἀλεξάνδρῳ βασιλεῖ ἐκομίσαντο 〔κ〕αὶ ἀπέδοσαν τῷ δήμῳ δεδόσθαι αὐτοῖς καὶ ἐγγόνοις ἀτέλειαν καὶ προεδρίην εἰς τὸν αἰεὶ χρόνον ἀναγράψαι δὲ τὸ ψήφισμα ἐν τῇ προαστείῳ τῇ πρὸ τοῦ ἀρχείου.

テオドトスの子ゴルゴス及びミンニオーンの兄弟當市共同利益に關し善正たり、又個人的にも多

數市民の福祉を計り、海小なるに就いてアレクサンドロス王と議して後、歸へり來つて市民に傳へて曰く、免稅と上席（筆者曰、劇場又は祭儀に際しての）着席の特權が我々及我々の子孫に永久に附與されたり、と。よつて市廳前に柱石を立て、之に該決議事項を記入す……。[9]

又カリアのプリエーネー市出土の碑文には、

Βασιλεὺς Ἀλέξανδρος ἀνέθηκε
τὸν ναὸν Ἀθηναίᾳ Πολιάδι.

アレクサンドロス王アテナイ市の守護女神の爲に神祠を奉建す。[10]

とある。我々は故にアリアヌスの記述又は碑文等により、小亞細亞世界及びその地方の希臘人とアレクサンドロスとの關係は精神的に深く固く結ばれたるものと言ひ得る。而して小亞細亞沿岸掌握の癌とも云ふべきペルシア艦隊に就いて見るに、アレクサンドロスがエヂプトに入り先づペルシウム Pelusium に到達した時、彼の艦隊は既にペルシアの夫を破つてエヂプトに向つてゐる。[11] 故にアレクサンドロスにとつては最早小亞細亞に就いて何ら顧慮すべきものはない。隨つて我々は、先づ、アレクサンドロスがアムモーン參詣せしは少くともそれが小亞の希臘人に對する政策ではなかつたと言ひ得るであらう。

然らば當時の希臘本土との關係は如何。

筆者は曩に前四世紀の希臘世界の無力なるを述べた(本誌前號拙稿參照)。テーバイ陷落の節該市の破壞と市民賣却を決したるものはアレクサンドロスと同盟して居た希臘人自身であつた。[12] テーバイ憤起に際し私に之を援助せんとしたアテナイもテーバイ陷落と同時に直ちに數名[13]の使節をアレクサンドロスに派しテーバイ陷落の祝賀の辭を述べしめた。かくの如き希臘世界の無力はアレクサンドロスが親しく觀て來た所である。

コリントスに於けるヘラス聯盟再締結に當り、その聯盟條約第一條に、希臘人は自由にして自治たるべし ἐπιτάττει ἡ συνθήκη εὐθὺς ἐν ἀρχῇ ἐλευθέρους εἶναι καὶ αὐτονόμους τοὺς Ἕλληνας.[14] と定めた。又追加條項に、「若し吾々が共同の平和條約に加入せんと欲すれば ἐὰν βουλώμεθα τῆς κοινῆς εἰρήνης μετέχειν」とあり、デモステネースをして「その反對の場合にも此條項は適用さるべきである」と言ひ得しめて居る。[15] 要は希臘聯盟加入國の自治を明言せるのである。然らば果して此聯盟條約は希臘世界の絶對的自由を措定せしものであるか。

アッティカ碑文全集第百六十番はアレクサンドロスと聯盟加入國との實質的關係を示すものとして注目さるべきであらう。此碑文はアテナイ出土のものにして、缺損箇所多きも文面より見てコリントス平和條約文のアテナイ市民に告示されし大理石碑文なるは明である。それによれば、

vs. 4—9. 予は此平和條約加入國の何れをも、それの窮狀に乘じて、海陸何れの地よりも、攻擊す

ること非ざるべし、……加入國の何れの戰にも斷じて……

vs. 10. 王の……

vs. 11—13. ……予は撲滅すべし……此平和の誓約を誓ひたりし各（加盟國）に……

vs. 14—15. その反對に、予は加盟國にも、他のものにも勢力增大を目的として向ふことあらざるべし

vs. 16. （略ど缺損し盡して不明）

vs. 17. 報告次第によつては、

vs. 18—20. 違反者に對し……予は武器をとるべし……次第で……ヘゲモーン……。

此處に、予 ἐγώ. 又は ἐποίσω, καταλήψομαι. καταλύσω, ἐπιτρέψω, πολεμήσω. 等の如き一人稱單數形動詞の使用あるはアレクサンドロスの意志表示を示すものでなければならない。然らば卽ち此碑文はコリントスの平和條約が內容に於て希臘世界の自由と自治を規定しつゝ、それの履行の誓はアレクサンドロスに對する加盟國の誓約たる實質を伴つたものであつたことを示すのである。蓋しデモステネース或はリクルゴス等の國家主義者が此條約を以て屈辱的なるものと觀たのは決して故なきことではないのである。[16] 希臘の無力なるに就いてアレクサンドロスの熟知せるは最早明であらう。

而して今やイッソスの勝利は、ヘラス聯盟締結の目的を貫徹したるものとして加入諸都市を歡喜せしめたであらう。アレクサンドロスの友にしてコリントス人デマラートスが「ダレイオスの王座に卽

きしアレクサンドロスを見ずして死去せる希臘人は、大なる喜びを奪はれたと言へる」[17]と言ひ、ダレイオスに對する復讐の成立を喜びし彼の心は、ペルシアに對する復讐を目指して結ばれたるヘラス聯盟加入諸都市市民の大部分の心であつたであらう。アレクサンドロスは、先に、グラニコス河畔の一戰に戰死せる二十五勇士の爲には工人リシッポスLysipposに命じて立像を作らしめ戰死者全部の兩親、子供等の地租、賦役、收入稅等を免除した。[18]而して捕虜とせるペルシア人は之をマケドニアに送り、戰利品は之をアテナイの女神アテーネーに奉納せしめた。且それに記して曰く、「ピリッポスの子アレクサンドロス及ラケダイモン人を除く希臘人の、アジア在住の蠻人より（奪ひし所のもの）Ἀλέξανδρος Φιλίππου καὶ οἱ Ἕλληνες πλὴν Λακεδαιμονίων ἀπὸ τῶν βαρβάρων τῶν τὴν Ἀσίαν κατοικούντων」[19]と。此如きアレクサンドロスの行爲は前述の小亞に存する希臘諸都市に與へし恩惠と共に、希臘人とアレクサンドロスとの關係を密接ならしめしものとして看過すべからざることである。

果してイッソス戰後、希臘人は、アレクサンドロスが希臘人の名に於て連戰連捷せるに祝意を表明することを決議した。我々は之をディオドロス、クルティウスの記述及び一碑文に於て之を知る。

ディオドーロスはヘラス聯盟總會がアレクサンドロスに祝意を表すべく黃金冠を贈るべしと決議したと言ひ、[20]クルティウスは、コリントス近郊のイストモスIsthmosに於けるポセイドーン祭に參集せし希臘人が戰勝祝意をこめたる黃金冠をアレクサンドロスに贈呈すべしと決議すと傳へて居る。[21]一の

碑文とはアテナイ關係のものにして、希臘碑文研究の權威者ケーラー U. Köhler 氏が一八七一年、アテナイにて發見されし二個の碑文斷片を合して復原せしものにして次の如く讀まれるものである。

στεφ[άνου, ὃν ὁ δῆμος ὁ Ἀθηναίων]
ἐστεφάνωσεν τοὺ[ς……],
στατῆρας ΔΔΔΔΠ ϟ[ϟ]ϟ. ἑ[τέρων]
στεφάνων δυοῖν, οἷς ὁ δῆμο[ς]
ὁ Ἀθηναίων ἐστεφάνωσε Ἀλ[ε]ξα[νδρον],
στατῆρας ΓΔΔΔΔΠϟϟ
καὶ δραχμὴ χρυσίν.

アテナイ市民……に加冠せし冠の價額は四十八スタテール。
アテナイ市民がアレクサンドロスに贈呈せし他の二個の冠の價額は金九十七スタテール一ドラクマ。

ケーラー氏は一八七一年發行ヘルメス Hermes 誌第五卷に初めて此復原碑文を發表し、此價額表はアテナイの財務官リクルゴス Lykurgos の發表にかゝるとなし、「此碑文にてはアレクサンドロスに王號がない。故に……此條件は然程重要視することは出來ないが……恐らくかのカイロネイア戰勝後、

ピリッポスの王子たるアレクサンドロスが戰死せるアテナイ市民の遺該をもつてアテナイに使した時にアレクサンドロスに贈られしものであらう」と言ひ、[22] 更に註して、「若し王號缺如を無視して考へるならば、Arrian., Anab. III. 6; 及び Diod. XVII. 48 に照して、此黃金冠捧呈は前三三一年アレクサンドロスのエヂプトよりの歸途時代とするが最も妥當である」と言つて居る。氏は一八八三年にアッティカ碑文全集 Corpus Inscriptionum Atticarum を發行した時には前三三一年說をとり、Factum id esse probabile est Ol. 112, 1. (331 a. Ch.) postquam rex ex Aegypto rediit, Cf. Arr. An. III. 6, 2. et Diod. XVII. 48. と註して居る。[23]

無論アレクサンドロスに王號なくとも、王位にある彼を表示し得たことは多くの碑文が之を證すべく、[24] ケーラー氏が王號有無を輕視したのは當然である。筆者は併し、ディオドーロスとアリアヌスの記述とをケーラー氏の如く、同一事實を言へるものの如く觀ることは暫らく保留したい。何故ならば、ディオドーロスは此冠贈呈をヘラス聯盟總會の決議なりと言ひ、碑文は明にアテナイ市民の贈呈なるを示し、アリアヌスは、「アレクサンドロスがエヂプトより歸へり、ティロス市に滯在せる時此處へ、アテナイよりの使節ディオバントス及びアキルレースがパラロス Παράλος (筆者曰、パラロスはアテナイの神聖なる船にして國家的に重要なる際、特にテオロイ派遣の際使用される) に乘船して來た。而して海岸の住民の使節も彼等と行を共にして來た」と記して居る。此記述はむしろ碑文面と一致すべ

きものでディオドーロスの記述する所とは相違すると考へられるのである。故に筆者はアリアヌスの此記述に照して前記碑文の年代を前三三一年初春及至三三二年の暮とするを最も妥當的なりと思惟するのである。

前記の如きディオドーロス、クルティウス、碑文及びアリアヌスの記述が同一事實の異なれる傳承か否かは今の筆者には決定すべき材料を有しない。併し、少くとも當時の希臘世界の親アレクサンドロス傾向のみは炳乎たる事實と言はざるを得ない。

先きにアレクサレドロスがゴルディオンに達した時、マケドニアの將軍に率ひられた新手の傭兵が本國及び希臘世界から到達し、アテナイよりの使節も來會して居る。[25] コリントスにはアレクサンドロスの信頼篤きアンティパトロスが駐屯軍司令官として常に希臘の動向に注目して居る。反マケドニア的動向あれば直ちに王に通知される筈である。東方遠征にあるアレクサンドロスに希臘の動靜は必ず熟知されて居たと見なければならない。彼がアムモーン參詣を終へてメムピスへ歸へり着いた時希臘より多くの使節と、アンティパトロスより送れる約四千人の希臘傭兵とが到着して居る。[26] 當時の希臘世界に何ら反マケドニア的傾向、アレクサンドロスをして後顧の憂あらしめるものゝ存在は考へられないであらう。

最後に筆者は以上の考察を裏書きするものとして、凡そアレクサンドロスの軍事工作に關して最も

信頼すべきアリアヌスの記述によりティロス市攻略に際してアレクサンドロスがその軍隊に向つてなせる演説を略示するであらう。卽ち曰く、

「ペルシア海軍が海上を制する限りエヂプト遠征は危險である。同樣に、不信のティロス市をエヂプト及びキプロスと共にペルシアの勢力下に放任したるまゝダレイオスを追擊することは出來ない。何とならば、もし然せんか、我々、特に希臘世界は從來より以上にペルシアの脅威を受けるからである。併し一度ティロスさへ我掌中のものとならんか、ペルシア勢力中の最大にして最善のフェニキア陸海軍全體は自ら我等のものとならう、又キプロスは我海軍により直ちに占領されるであらう。マケドニア及びフェニキアの艦隊を以て海上を抑へキプロス我手に入らば、海上制覇は言ふ迄もなし、我等のエヂプト進軍亦顧念する所なく行はれるであらう。エヂプトを征服せんか、最早我々は本國が脅威されんかとの憂を抱く必要はない、かくて我々は始めて、本國に就いての念慮なくバビロンに向つて進軍し得るであらう」[27]と。

ティロス既に陷落し、ペルシア海軍最早力なく、アレクサンドロスの海軍海上を壓し、戰はずしてエヂプトを掌握したアレクサンドロスにとつて、希臘に關する後顧の憂は完く消滅したのである。彼にあつてはペルシアより希臘本國が襲はれんかとの憂こそあつたれ、それが彼に反抗せんかといふが如きは完く念頭になかつたと言はねばならない。

かくの如き時アレクサンドロスはアムモーンに參詣したのである。何をもつてこの事件を彼が尙ギリシア懷柔を目指したものと解し得やうか。

要是、筆者はケールスト氏説を、アレクサンドロスのアムモーン行がエヂプト土着民懷柔策とすることの否定されると同樣なる意味に於て、否定さるべきものと考へるのである。

（註）

① Meyer, a. a. O. S. 303.
Theod. Birt, Alexander der Grosse.² Leipzig. 1925. S. 446.
Wilcken, a. a. O. S. 104.

② Arr., An. I, 17.

③ ibid.

④ ibid.

⑤ Arr., a. a. O. I, 18.

⑥ Arr., a. a. O. I, 19.

⑦ Arr., a. a. O. I, 23. Plut., Alex. 22.
Diod. XVII. 24.

⑧ Arr, a. a. O. I, 26, 27.

⑨ Sylloge. I²: N. 157.
C. I. G. 2672 [ἐπὶ]……Λυκο[ῦ]ργος? となつて居るが Sylloge に從ひ Πο[ρ]γος をとつた。

⑩ C. I. G. 2904. Vgl. Arr., An. I, 17, 18, 19, 23.

⑪ Arr, a. a. O. III. 1. 前節註七參照

⑫ Arr., a. a. O. I, 9. Diod. XVII. 14.
Plut., Alex. 11. Just. XI. 3 f.

⑬ Arr., a. a. O. I, 10. には十名と言ひ、Plut., Dem. 23 には八名となつて居るが何れが正確なるか決し難い。

⑭ Demosth. περὶ τῆς πρὸς Ἀλέξανδρον συνθήκας, 323.

⑮ Demosth. a. a. O. 220.

⑯ ibid. 214.

デモステネースのこの書によつてコリントス條約の内容を見ると大體次のやうである。（數字は本書の節を示す）

一、希臘人は自由にして自治たるべし。（三二三）

一、平和條約成立現在の加盟國各國制度を破壞するものは爾餘の加盟國全體の敵たるべし。（三二四）

一、平和條約に加入し共同防衛を協定せし國にありては、現行制度を破り新しき狀態を作り出さんとして死刑・追放・黄白の授受・土地割讓・借金の禁引・奴隷解放等の行あるべからず。（二一五）

一、加入國より追放されたる者は何れの加入國の爲にも戰場に出るべからず。加入國にして彼等を迎へんとするものは聯盟より除外すべし。（二一六）

一、全加盟國々民の航海は自由なり。何れのものも之を妨ぐ可らず、その船を鹵獲す可らず。之に反するものは全加盟者の敵とすべし。（二一七）

一、加盟國は——筆者曰、「勝手に」を補ふべきか——武力行爲あるべからず。（二一六）

デモステネースは以上の諸條項を擧げつゝ、一々例證を以てアレクサンドロスの條約非違を擧示して居るのである。デモステネースにとつては此條約は「アテナイ市民の法を蹂躙せるもの（二一四）」であつた。併し當時のアテナ市民の大勢は條約遵守の傾向にあつたことは、此演說の冒頭に於て「おゝ、アテナイ市民諸君、諸君に向ひ、此等の誓と協定を遵守すべしと慫慂し

て居る人々が、眞に確固たる信念を以てして居るのであるならば、彼等に諸君が追隨するのは當然であらう。併し諸君、報酬を受けて富を增し、此協定遵守を諸君に强ひる者があるのですぞ」と言つて居るより推察し得られるのである。

リクルゴスはレオクラテア（レオクラテース告訴演說）に於て、カイロネイアの敗戰の時、私に祖國アテナイを逃れ、五・六年後アテナイに歸り來れるレオクラテースを非國民として告訴して居るのである。第十二節に於てカイロネイアに戰死せる者を賞讃して後「彼等の上に、唯彼等の上にのみ希臘の自由は依據して居る。彼等の死と共に希臘は隸屬の地位に沈んで了つた……云々」と言つてゐる。

⑰ Plut., Alex. 37.
⑱ Arr., a. a. O. I, 15.
⑲ ibid.
⑳ Diod. XVII. 48.
㉑ Curt. IV. 22.
㉒ Hermes V. S. 226.
㉓ C. I. Att. 741, A. fr. fg.
㉔ C. I. G. 135, 136, 448.
㉕ Arr., a. a. O. I, 29.
㉖ Arr., a. a. O. III, 5.
㉗ Arr., a. a. O. II, 17.

五　の　四

マイヤー氏はアレクサンドロスのアムモーン參詣を、彼が以てアムモーンの子となり、神的地位に

昇り、希臘人と自己との間に越ゆべからざる溝渠を開かん爲であるとした。此如き思考はアレクサンドロスの世界支配精神の一展開として此アムモーン參詣事件を考へる時一應考へ得られることである。

併し乍ら、アレクサンドロスに對する希臘人の信頼と感謝とは、總じて彼の行動が希臘の代表者、希臘精神の實現者とするによる。人間アレクサンドロスを神アレクサンドロスへの昂揚は直ちに希臘人と彼との關係の大變革を齎さなければならない。それ自身假令希臘英雄崇拜に見られる以人爲神思想に依據するとしても、爲政者の、上からの要求たるに於て——普通希臘の英雄崇拜が下からの、むしろ自由を享受したことの喜び、乃至かゝる意味に於ける喜びの追憶によるものたるに反し——却て直接自己否定を强要するするものに他ならないからである。此意味に於て神的地位に上らんとするの要求は完く希臘精神からの分離を意味する。かゝる要求をせんか、そは希臘にあつて不斷の國民主義運動をつゞけて居るデモステネース、リクルゴス等にとつて此上もなき口實となるは必定である。アレクサンドロス自身希臘に於ける彼等の運動を知つて居る筈である。[1] アムモーン參詣當時はダレイオス尙バビロンにあつて彼を要擊せんとして居る時である。アレクサンドロスの將來は未だ不明である、かゝる時にかゝる危險を齎らすべきを望んだとすることは、マイヤー氏と同じくアレクサンドロスの卓越せる個性を認める筆者の容易に首肯し得ざる所である。

抑々古代著作家は此點に關して如何に傳へて居るのであるか。我々は史料そのものへ復歸して考へねばならない。故に筆者はこゝに筆者の見得た限りの此事實に關する古代著作家の傳承を略示するであらう。

一、アリアヌスは記す、

アレクサンドロス託宣をきゝて後人に語りて曰く、「託宣は我心を喜ばしむ」と。②

一、ディオドーロスは記す、

アレクサンドロス祭司に導かれて神祠に入るや、老卜師出で來りて曰く、「おゝ我子よ、是神の呼び給へるものと知るべし」と。アレクサンドロス之に對して、「父よ、父もし我に全世界の支配權を附與し給はゞ、我又今後かく呼ばん」と答ふ。於此祭司神像に近づく、人々之を高くさゝぐるや神或徵をなす。祭司卽ち占して曰く「神は汝の願をきこしめし給ふ」と。アレクサンドロス尙ピリッポス暗殺者全部の復讐されしや否やを問ふ。…云々。③

一、クルティウスは記す、

祭司中の長老は近づき來る王に「我子よ、汝の父ユピテルは此名を汝に賜ふ」と言へり。王之を受け、次いで尋ねて云ふ「我父は我に全世界支配の權を我にさづけ給ふや」と。祭司則ち同樣なる阿諛を以て「汝全世界の支配者たらん」と告ぐ。王重ねて問ふ「我父の暗殺者は總て懲罰されしや

否や」と…云々。④

一、ユスティヌスは記す、

アレクサンドロスの神祠に入るや、直ちに祭司はアムモーンの子として彼に挨拶す。王ついで問ふ「我父の暗殺者は總て懲罰されしや」と。祭司曰く、「汝の父は殺されることなく死すこともなし、されどピリッポスの復讐は既になれり」と。アレクサンドロス更に總ての戰に於ける勝利と全世界の支配を望む。祭司「汝の意のまゝにならん」と答へ、更に彼の從者に向ひ「汝等嚮後アレクサンドロスを神として崇ぶべし」と言へり…云々。⑤

一、プルタルコスは傳ふ、

アレクサンドロスの託宣所に入るや、アムモーンの豫言者彼を此神の子として迎ふ。アレクサンドロスは「我父の暗殺者のうち誰か逃れし者なきや」を尋ねしに豫言者是に答へて曰く、「謹しみ給へ言の葉を、汝が父は死すべき父に非ざればなり」と。故に王はピリッポス暗殺者の總て罰せられたるや否やを尋ね、更に全人類支配權の附與を懇請す。神之(支配權)を與へ、ピリッポスの復讐は既になれるを傳ふ。

以上は多くの著作家の此託宣につき記述する所なり。されどアレクサンドロス自らはその母への書簡に「予は祕密の託宣を受け申し候。歸國の節母上にのみは御漏し可申候云々」と記せり。…

云々。⑥

一、僞カルリステネースによれば次の如し、

彼（アレクサンドロス）はアムモーンの子と告げらる。於此彼は「父よ、予が君の子なるを予が母は認むるや否や、之を告げ給へ」と願ふ。かくて彼はアムモーンが彼の母オリムピアスを抱き、彼に向ひ「我子アレクサンドロス、汝は我が種より生れしなり」と告げしを聞けり…云々。⑦

一、ストラボーンは傳ふ、

さて、カルリステネースは曰く、「アレクサンドロスは非常に名譽心强く、加ふるにペルセウス及ヘラクレースも曾て詣でしことありしを聞きゐたれば、此神の託宣をきかんとせり。アレクサンドロスのアムモーン神祠に至るや祭司は彼がヅェウスの子なりと呼びぬ」と。⑧

以上が筆者の見得し所のアムモーン參詣に關する古代著述家の記述の大要である。上記アリアヌスとプルタルコス說とは、アレクサンドロスが託宣內容を漏さずとするに於て通ずるものあるが如きも、併しアリアヌス自身はアムモーン託宣の內容に就いて知る所があつたと見なければならない點が存する。それは右に示したる彼の所說の少しく前の箇所に、卽ちアナバシス第三卷第三節に、「今や彼はリビアのアムモーンに參詣し神託を受けんと志しぬ。是一には、この神託が正確さを以て著名なるのみならず、ヘラクレース及びペルセウスも亦此託宣をきけりと言はれてあればなり。而して二に

は、彼の崇拜し且その祖先と思惟せるヘラクレース及びペルセウスがヅェウスの子孫と傳へられたると同じく、自らも亦アムモーンの後裔なりとなしたればなり。かくて彼はアムモーン參詣によりて彼自身のこと τὰ αὐτοῦ に就きても確實なる教示を受けんとしたるなり。云々」と言つて居ることが注目されるからである。此記述と、アレクサンドロスの語りし所とせる「我意を滿足せしむ」といふ記述とは結合して考へらるべきものであらう。然らばアリアヌス自身に於ては「我意を充せり」の「我意」の中には「アムモーンの子云々」が含まれて居るとしなければならない。又「託宣をきかんとせり」を前掲アナバシス第二卷第十七節に見えるアレクサンドロスの演說內容、之に加へて第三卷第一節にみえる「今やアレクサンドロスは彼が以前より目指せし所のエヂプトに向つて出發せり」といふアリアヌスの記述とを併せ考察せば、「託宣をきかんとせり」の託宣の內容はアジア征服或は世界征服に就いてのものと考へられるであらう。かく考へ來れば前記アムモーン託宣の諸記述のうち、プルタルコス說以外は皆一致して、アレクサンドロスのアムモーンの子なること、及び彼の世界支配に關する託宣なりしを示すのである。アムモーンの子としての託宣ありしことは、リシマコス時代の貨幣の上にアレクサンドロスがアムモーンの象徵たる牡羊の角をつけてあらはされてをり、[9] 前三世紀プトレマイオス家の王環に「アムモーンに愛されラーに選ばれたるアレクサンドロス、或はラーの子アレクサンドロス」[10] とあるによつても明である。而して多くの著作家は、父に就いての問答にもみられる如く、アムモーン

の子たる託宣はアレクサンドロスの意を受ける前に祭司又は卜師の言として居るのである。

併しヘラクレース及びペルセウス傳說に關聯せしめアレクサンドロスがアムモーンの子たらんとしたとするアリアヌスの記述は一應考慮されねばならない。

アリアヌスがアレクサンドロスのアムモーン參詣をヘラクレースと、ペルセウスとの傳說に連繫して叙述したのは抑も如何なる史料によつたものであらうか。我々は既にストラボーンの記述によりヘラクレース及びペルセウス傳說とアレクサンドロスのアムモーン參詣とを結合した者がカルリステネースなるを知つた。而してストラボーンは XI. 509. XIV. 672. XV. 691. XV. 694. XV. 701. XV. 706. XV. 714. XVI. 741. XVI. 766. XVII. 824. にアリストブーロスを引用し、VII. 301. にはプトレマイオスを引用して居る。隨つてストラボーンはアリアヌスの典據とせしアリストブーロス及びプトレマイオスの書を參考にしたるは明であらう。時代的に言つてもストラボーンは紀元前六十三年頃より紀元十九年迄の人であり、アリアヌスは紀元二世紀に活躍せし人である、故にアリアヌスの使用したる上記二者の書はストラボーン時代に存在し、彼が此を直接參照したることはあり得たことである。而もストラボーンが 'Ο γοῦν καλλιστθένης φησὶ τὸν Ἀλέξανδρον φιλοδοξήσαι μάλιστα κτλ. といふ表現法を用ひたといふことは注意されねばならない。卽ち筆者は右の諸關係を綜合してヘラクレース並にペルセウス傳說とアレクサンドロスのアムモーン參詣との結合はアリストブーロスでもなく、プ

トレマイオスでもなく、カルリステネースその人に始るに非ずやと思惟するのである。

アリアヌスはカルリステネースに就いて相當深く理解もし(アナバシス IV, 10.)、特にカルリステネースの名を擧げて其說を引用して居る所もある (IV, 11.)。故に彼がカルリステネースの書を參考にしたるは明である。而してアリアヌスはアナバシスの序言にアレクサンドロスの歷史著作として最も信賴すべきはプトレマイオス並にアリストブーロスなりと云ひ、更に「アレクサンドロス傳記の二・三のものには同樣に信賴に價するもの、一概に拒否し得ざるものがある。故に予はこれ等をも引用した。が此際『或人の語る所によれば ὡς λεγόμενα』としてのみ之を引用した」と云つて居る。此序文に照して前記アナバシス第三卷第三節を見るに、そこには何らの限定なくヘラクレース及びペルセウス傳說に結びつけられて居る。故に一見すれば、それがプトレマイオスかアリストブーロスの說の如く考へられるのである。併し限定なき所は必ず此二者の說とすべきか否かは疑問である。何となればアリアヌスの叙述法は必ずしも序文通りになつて居ないからである。

現在殘存するアリアヌスのアナバシスは第七卷第十二節の最後の數行の缺損せる以外は殆んど完全なるものであるが、此全篇を通じて、アリストブーロス曰くとする所は三十箇所[11]、プトレマイオス曰くとする所は二十箇所[12]、某曰く、或は二三氏曰くとする所は非常に多い。大體に於て特別の限定なき限りはプトレマイオス、アリストブーロスの說と思はれるのであるが、必ずしも然らざる場合もある

のである。その著しき一例を我々は第七卷第十四節と同第二十三節とに見出す。兩者共にヘパイスティオーンの死に關する記述を含むが、第十四節には「アレクサンドロスは常に、ヘパイスティオーンにヘロスとして供犧するやう命じて居た――このことは一般に記述されて居る所である。但し二三氏は、彼がアムモーンに使を派し、（筆者補ふ、――ヘパイスティオーンにヘロスとして供犧すべきや否やを）うかゞはしめた、と言つて居る」と見えて居る。隨つてアムモーンへの使者派遣の事實はアリストブーロス、プトレマイオスの記述ならざるは確である。然るに第二十三節にては何ら典據的限定を云はずして、「こゝにアムモーンへの使者歸へり來つて、ヘパイスティオーンをヘロスとすべき神託を復奏した、云々」とある。第十四節から第二十三節迄にはアリストス、アスクレピアデース（第十五節）、アリストブーロス（第十七節、第十九節、第二十節）その他の說が記されて居るのみならず、幾度か文章は完結して居る。隨つて第十四節の二三氏曰く、が文章上第二十三節迄かゝらざるは言ふ迄もないであらう。第二十三節に記されたるアムモーンよりの使節歸來の事實は、どこ迄も二三氏の說なるべく、叙述法の上にてはプトレマイオス・アリストブーロス說の姿をなすのである。是筆者が上記二節を以てアリアヌスの記述に於て無限定的記述も必ずしもプトレマイオス・アリストブーロス說となし得ざることの一例とする所以である。然らば卽ちアリアヌスによる、アレクサンドロスのアムモーン參詣事件とヘラクレース・ペルセウス傳記との結合は、プトレマイオス・アリストブーロスによ

るものとする必要はなく、むしろカルリステネースによるとするが許されるであらう。

然らばカルリステネースとは如何なる人物であつたか。彼に就いてポリビオスの傳へる所によれば、「ティマイオスは、カルリステネースが阿諛者にして哲學者ではない、アレクサンドロスが彼を罰したるは當然である、何故ならば彼はアレクサンドロスの心を出來るだけ亂したからである。ティマイオスは當時の有名なる雄辯家デモステネースその他を希臘人として相應しい人物なりと評して居る、それは彼等がアレクサンドロスの崇拜要求に反對して居るからである。云々」。[13]「カルリステネースはアレクサンドロスを神聖化せんとした。云々」[14]と見えて居る。ティマイオス及ポリビオスのカルリステネース批評は、少くもアレクサンドロスが神的崇拜を要求する迄のアレクサンドロスに對するカルリステネースには妥當するであらう。カルリステネースはアレクサンドロスをして世界的に著名なる人物たらしめんと希つて居たのである。[15]併しカルリステネースがアレクサンドロスを賞讃し尊敬したのはアレクサンドロスが希臘精神に從つて活動する限りに於てゞあつた。アレクサンドロスが東方化し希臘精神からの分離を表示せんか、カルリステネースは彼に對する强硬なる反對者、非難者に轉じたのである。卽ベッソスを處刑し今や前アジア征服完成の域に達したアレクサンドロスが、漸次東方風の採用に傾き遂に從軍の將卒に彼を神として禮拜すべきを要求した時、カルリステネースは、將卒の無言なるに反して敢然として立ち「予の意見によれば、アレクサンドロスは人に適應すべき尊敬は受く

べきである。併し凡そ世界には人に對する尊敬と神に對する禮拜との間には儼然たる區別が存する。……神と人とに對して同じ禮拜を捧げるは神を引き下げ、人をして常軌を逸せしめることであつて不當である。勿論アレクサンドロスは勇士中の勇士であり、王者中の王者であり、將軍中の將軍である。併し希臘人はヘラクレースすら之を生前崇拜することはなかつた。死後の崇拜と雖もデルポイの託宣によつて後のことである。云々」と叫び反對意見を表明して居るのである。

前記ストラボーン第十七卷第八一四節のカルリステネースの「アレクサンドロスは非常に名譽心が強かつたので云々」の表現は、決してアレクサンドロスに對する尊敬、親愛の念によるとは考へられない、むしろ反アレクサンドル的な精神さへ見える。何れにしてもカルリステネースの此叙述は彼の小主觀の混入を認めざるを得ない。隨つてカルリステネースの此敍述をそのまゝ事實として受容することは出來ないであらう。是筆者がアレクサンドロスのアムモーン行きとヘラクレース・ペルセウス傳說と結合し、アレクサンドロスがアムモーンの子たらんとしたとするアリアヌスの記述を俄に信ずべからずとする所以である。

以上筆者はアリアヌスの記述せる「かくてアレクサンドロスは彼自身のことに就きて確實なる敎示を受けんとしたるなり」を、直ぐ前の文章たる「彼自らも亦アムモーンの後裔なりとなしたればなり」と結合して考察を進めたのである。此 τὰ αὐτοῦ はアリアヌスの記述する限りの事實との結合は筆者の

如く解するを最も妥當と信ずるのであるが、彼のアナバシスの一飜譯者 Christian Heinrich Dörner 氏は此 τὰ αὐτοῦ に關してはプルタルコスのアレクサンドロス傳第三節を參照すべしと註して居る。[17] 氏のもつて示す所はアレクサンドロスの神聖家系の傳承である。

アレクサンドロスがヘラクレースの後裔なることはアリアヌスのアナバシス第二卷第五節にも見える所であつて、イソクラテースのピリピカ第十二、四十五・四十六・四十七節等にも言はれて居る所である。故にこのことは當時の希臘世界に一般に信じられた所であると言ひ得る。併しこれが爲に彼が神聖なる存在とされたことはない。隨つて τὰ αὐτοῦ が何らか彼が以て自己を神聖化せんとした事實とするならば、我々はプルタルコスのアレクサンドロス傳第二・三節に傳へられる彼の神聖誕生譚とする他はないであらう。然らばその神聖誕生譚とは如何なる物語であるか、プルタルコス上記の箇所によれば、次の如き譚である。「オリムピアス（アレクサンドロスの母）はピリッポスと結婚し床を同うする前の夜、雷鳴しきりに轟き、雷電遂に彼女の腹の上に落ち、火炎大に燃え上り火花となつて四方に散じて後消滅したといふ夢をみた。結婚後ピリッポスは、彼が妻の腹の上に一の封印をなす夢をみた。」「人或は云ふ、彼女は、その成長後大膽にしてライオンの如き者となるべき子を懷胎す、と。」「或は云ふ、ピリッポスは彼女が或神聖なるものゝ妻なりと考へ畏怖して彼女と床を同うするを避けた、と。」「又云ふ、アレクサンドロス將に遠征の途に上らんとする時、オリムピアス私にアレクサンドロスに向

ひ、彼の誕生の祕密を打明け、その誕生に相應しき目的をもつべしと語つた、と。」

τὰ αὐτοῦ を右の如き傳承とするは一應考へ得られることである。併し乍らかくの如き神聖誕生譚は、ヘレニズム文化世界にあつて偉人の死後その個性に結びつきて必ず出現した物語であつて、ローマ皇帝アウグスツスの神聖誕生譚[18]、又はキリストのそれ[19]の如き皆その同型のものである。アレクサンドロスの神聖誕生譚も、彼の死後彼の個性の變形して表れたものと見らるべきである。[20] 何となれば古代著作家皆アレクサンドロスをピリッポスの子とせるのみならず、我々は又當時の碑文に於ても明に

ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΝ 「ピリッポスの子
ΦΙΛΙΠΠΟΥ ΤΟΝ アレクサンドロスを」[21]

とあるを見るのである。アレクサンドロス時代の人々のうちに、彼がピリッポスの子たるを疑ひし者はなかつたであらう。τὰ αὐτοῦ をドェルナー氏の如き意味にとることが許される爲には、後代の物語を時間的に繰上げてアレクサンドロス時代の事實としなければならないと云ふ矛盾を犯さねばならないであらう。隨て τὰ αὐτοῦ は筆者の如く解する他はないと信ずるのである。

以上の如くアレクサンドロスのアムモーン參詣史料を檢察するに、マイヤー氏説の根柢たるべき、アレクサンドロスがアムモーンの子たらんとしたとすることは容易に首肯し得ないのである。

更にケールスト及びマイヤー兩氏に共通する所の、此參詣を以て希臘人に對する政策なりとせば、

彼はアムモーンの子たる託宣をうけたるの宣傳につとむべきであつたであらう。然るにエヂプトよりシリアに歸へり、ティロス市に入つた彼は直ちに以前の如くヘラクレースに供犧して居る。[22] 此れ彼がアムモーンの子たることを政策的に利用せんとしたものでない一證左である。

以上の諸論證により、筆者はケールスト、マイヤー兩氏によつて代表さるべき、アレクサンドロスのアムモーン參詣事件を希臘人に對する政策とすることには首肯し得ないのであつて、むしろウィルケン氏説を妥當なりと信ずるのである。

では彼をして難路をおかしてアムモーンの託宣をうかゞはしめた「未來への關心」とは何か。是に對しては、既に古典諸著作家に一致して見える如く、又その立論に於ては相違すれ、マイヤー、ケールスト兩氏も認める如く、政治的關係に於てやがて希臘精神を超越するに至る所の世界支配精神へと展開すべきアジア支配の要求なりと答へるに筆者は躊躇しないであらう。何となれば、我々はゴルディオンの不解の紐に纏る事件、[23] 並にイッソス戰後二回に亙るダレイオスの和解要求に對するアレクサンドロスの態度に既に[24]彼が、少くも、アジア支配を要求するを知るからである。アレクサンドロス研究者にとつて此等の事實は餘りにも周知の事實であり、それがガウガメラ戰後の彼の世界支配要求への第一段階たりしことは最早論ずる迄もないであらう。

ダレイオスの死後アジアの王となりベッソスを殺し以てダレイオスの仇を報じて後の彼が、益々東

方風を採用したこと、之に對するマケドニア陣營内の反抗運動、彼の海上探見の希望、前三二四年の追放者復歸命令、希臘に對する崇拜の要求等は皆彼の世界支配精神の特殊な顯現と觀らるべきである。[25]

實に前三二四年の事件はアレクサンドロスの對希臘關係の窮局的事件と見るべく、アレクサンドロスの、ヘラス聯盟のヘゲモーンとしてのその法律上の地位と、發展し行きし彼の支配精神との矛盾の決定的清算と考へるられ、前三二三年希臘よりのテオロイのバビロン到着は、曩に述べし前四世紀の希臘世界の動向の一具體化であり、又、正に世界支配者アレクサンドロスの地位の確定である、と同時に、ヘレニズム文化世界に今後起るべき君主崇拜てふ一文化形態の先鞭である。此如きヘレニズム世界の人間神化の思想が具體的な政治、世界支配と結びつきて具體化せるがローマ皇帝崇拜に於て、純宗教的な發現とすべきが基督崇拜に於て觀得られるのではなからうか。（完）（一九三三・一二・九脱稿）

（註）

① テーバイ陷落の秋、アレクサンドロスはアテナイに於ける反マケドニア派の首領 Demosthenes, Lykurgos, Hyperides, Polyeuktos, Chares, Charidemos, Fphiultes, Diotimos, Moirokles 等の引渡を要求したことがあつた。アテナイは使を派してその赦しを乞ひ容れられたのである。（Arr., An. I, 10).

② Arr. III. 4.

③ Diod, XVII, 51.

④ Curt, IV, 32.

⑤ Just. XI, 11.

⑥ Plut., Alex. XXVII, 4 f.

⑦ Pseud.-Call. I, 30.

⑧ Strabo, 814, Call. fr. 36.

⑨ Droysen; Alex. d. Grosse.[6] にみえる Münzen zur Geschichte Alexanders d. Grossen. No. 7. u. 8.

⑩ Wilcken, a. a. O. S. 105.

⑪ Arist. 曰くよあるは II, 3, 4, 12, I, 3, 3, 4, 11, 26, 28, 30, IV, 3, 6, 8, 13, 14, 14, V, 14, 29, VI, II, 22, 28, 29, VII, 4, 17, 19, 20, 22, 24, 28, 29.

⑫ I, 2, 8, II, 11, 12, III 3, 4, 17, 26, 30, IV, 14, 25, V, 14, 20, 20, 28, VI, 2, 10, 11, 11.

⑬ Polyb. XII, 12.

⑭ Polyb. XII, 23.

⑮ Arr., Anab. IV, 10.

⑯ Arr., Anab. IV, 11, Vgl. IV, 12, 13, 14.

⑰ Dörner; Arrian, s von Nicomedien Werke, Stuttgart. 1829, S. 244 Anm. 1.

⑱ Suetonius, Divus Augustus. 94. にアウグスツスの誕生について次の如き物語を記して居る。「アウグスツスの母アティアが或夜アポロの神殿に詣でて後、輿の中で寢て了つた。やがて彼女は異樣な物音に夢を破られ、我に返り、宛も短刀を以て傷つけられたやうな傷跡が身について居るのに氣づいた。このことがあつてより十ヶ月してアウグスツスが生れた。彼が生れる少しく前にアティアは自分の內臟が昇天し、天地に充滿した夢をみた」又「彼の父 オクタヴィウスはその妻の膝から光背眩ゆき子供の生れる夢をみた。…その日はカティリナ陰謀事件の爲元老院の開かれた日であつた。彼は妻の分娩のため少し遲刻して登院した。所が當時一代の星學者として謳はれて居たニギディウス・ティグルスが彼に向ひ、——君の遲刻するだらうことを先刻我々は承知して居た。我々は今丁度君の子の生れた時こそ此世界の主が生れ給うた時であると話し合つて居たところだ——と言

つた」又「クインツス・カツルスといふ人が或日カピトール丘上のユピテルの神祠に參詣したが、その日の夜と次の夜とに二つの夢をみた。第一夜の夢に於ては、ユピテルがその神壇近くに遊んで居た子等のうちの一人を側に引きよせ、女神ローマの神像をその子の膝に押しあてた。第二夜の夢では前夜ユピテルに引きよせられた子供がユピテルの膝の上に坐して居た。やがてユピテルは祭司をしてその子を膝よりおろさしめたが、その時祭司に向ひ――この子は長じて國の保護者となるであらう――と言つた。その翌日カツルスは少年アウグスツスに出會ふや否や、此子は夢にみた子に完く生き寫しだと叫んだ。」

⑲ 新譯聖書マタイ傳第一章

斯て此事を思念せる時に主の使者かれが夢に現はれて曰けるは、ダビデの裔ヨセフよ汝妻マリアを娶ることを懼るゝ勿れ。その孕める所の者は聖靈によるなり。かれ子を生まん、其名をイエスと名づくべし、そはその民を罪より救はんとすればなり。……ヨセフねむりより起て主の使者の命ぜし言葉に遵ひ其妻を娶りたれど初子の生るゝまで牀を同うせざりき。其生れし子をイエスと名づけたり。

⑳ E. Kornemann; Zur Gesch. d. antik. Herrscherkulte (in Klio Bd. I), S. 60.

㉑ C. I. G. 135.

㉒ Arr., An. III, 6.

㉜ アレクサンドロスは前三三四（遠征第一年目）の暮プリギアの主都ゴルディオン（又はゴルディエイオン）に到着、一日彼はゴルディオス及びその子ミダスの王宮に上り、ゴルディオスの車を見た。此車の軛に一の紐が卷かれてゐた。此地の住民の傳承する所によれば此紐を解きほどきし者はアジアの支配者となるといふのである。その紐は山茱萸の樹皮より作られたもので、その兩端が何處にあるか不明であつた。アレクサンドロスは則ち劍を以て切斷したのである。但しアリストブーロスは手斧を以て切斷し之を解いたと云つて居る。（Arr., An. II. 3, Curt. III, 2, 3. Plut, Alex. XVIII, 1.）

㉔ イソスの戰後アレクサンドロスがマラトス市に滯在せる時、ダレイオスが書簡を以て友誼と盟邦たらんことを求めて來た。アレクサンドロスは此要請を卻けた書簡の中に曰く、「予は先づ卿の將軍・代官等を破り、更に今卿及びその統率下の軍勢に打勝

つた。故に此地は神の惠により我掌中のものである。予は今アシアの主である。……故に今後予が許に使を遣る時はアシアの主に遣るなるを考慮されよ。希望ある時は同等の地位にある者に對するが如くせず、主に對する如く提議されよ。云々(Arr., An. II, 14).

ティロス攻撃中のアレクサンドロスの許にダレイオスの第二回目の和平要請の書簡が來た。

それは

一、捕虜となれる(ダレイオスの)母・妻・子供を返還されたし、それに對しては、身代金として一萬タレントを支拂ふべし。

二、ユーフラテス河以西の地を割讓すべし。

三、(ダレイオスの)娘をアレクサンドロスに嫁せしむべし。

といふ條件づきであつた。

此條件をアレクサドンロスがその幕僚に見せた時、幕僚の一人パルメニオは「もし予がアレクサンドロスならば之を容認すべし」と言つた。アレクサンドロスは「予がもしパルメニオならば予も亦然するであらう。予は金も土地も全部を要求する。云々」と云つた。(Arr., An. II. 25. Just, XII, 3. Plut., Alex, 29. Diod., XVII, 39.)

㉕

此點に關し、最近、粟野賴之祐氏は、史學雜誌第四十四篇第八・九號に「B.C.三二四年ヘラス聯盟定期總會とアレクサンドロスの君主禮拜制確定の研究」と題し詳細なる論證を發表され、筆者の教へられた所甚だ大であつた。併し乍ら追放復歸令に就いては筆者は「Es war ein Befehl, den er rein aus königlicher Machtvollkommenheit erliess, ohne die Organe der hellenischen Bundesgewalt in irgend einen Form hinzuziehen (Gesch. d. Hell. I. S. 503 f.)と言へるケールストの如く、それをアレクサンドロスの世界支配精神の一發現、隨つてむしろ反希臘精神の發露とするを可としたい。追放復歸令の齎すべき結果は重大であるが、神的禮拜の要求は直接希臘人全體の自己否定に關する問題である。兩者の重要性に就いては容易に測量し得ざるものがある。隨つて前者について、かゝる困難なる問題を解決する唯一最善の方法は之をヘラス聯盟の協讃決議を受くることであるとすれば、後者の如きは尙更でながらうか。もしヘラス聯盟の協讃決議をアレクサンドロスが必要として協讃を經たとするな

らば、アレクサンドロスの精神は正しく前三二四年のある小期間のうちに一大轉向をしたことになるであらう。アレクサンドロスの政策發展考察上、かゝることが正當視されるのであらうか。恐らく栗野氏も氏が掲示されて居る七ヶ條の外的事情が有力なる證左とは考へられなかつたことと思ふ。氏は既に十年間ヘラス聯盟を研究されて居ると聞く、願はくば藤學なる筆者の蒙を啓かれんことを。